



五小だより



五小ブログ

五小ボランティア

10月号

令和5年9月29日

国分寺市立第五小学校

校長 橋本 弥記

学校教育目標 ○元気な子 ○やりとげる子 ◎考える子 ○思いやりのある子

誰かと向き合い、自分を見つめて、ここで大人になっていく

校長 橋本 弥記

小学校の卒業文集に「将来の夢」を『小学校の先生』と書いていたことに、就職直前にたまたま開いて気付いた。他の職業をあの頃思いつかなかったのだろうと、今なら思う。同じクラスの子たちが書いたものには「〇〇デザイナー」が多かった。他の職業も思いつかなかったが、〇〇デザイナーになるようなセンスが自分にあるとも思えなかった。ならば、学校の先生になるセンスはあると思えたのかと問われたら、たぶん黙るしかない。

実際に小学校の先生になってみて、初めて分かったことがたくさんあった。小学校の先生に求められるとは思っていなかったことの中から自分の適性が見いだせたようなこともあった。同じようなことが副校長になったときにもあった。管理職に求められるとは思っていなかったことにも、求められると思っていたことにも、自分の中から意外な面を見たことがあった。こうなると、適性や長所とか可能性とかはそもそも何なのか、よくわからなくなってくる。ただ「立場が人を育てる」というのは確かにそうだと思うところがある。

6年生を対象にして令和5年4月18日（火）に実施された「令和5年度全国学力・学習状況調査」の結果資料の中には、恒例の「児童質問紙」があり、中には毎年出されている同じ質問がある。例えば、第1問目は「朝食を毎日食べていますか」という問いで、本校の児童には昨年度も今年度も否定的な回答（「あまりしていない」「全くしていない」）がほとんどない。このように、毎年あまり傾向が変わらない回答がある一方で、その年度によって変わってくるものがある。

「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」の問いでは、肯定的回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）の割合が本校ではこれまで東京都や全国の集計結果より低かったが、今年度はほぼ同じだった。しかも、本校も東京都も全国のデータも、肯定的な割合が高まっている。多面的な考え方に触れたり、いろいろな意見に出合ったりする活動を学習の中で多く取り入れようとする先生や学校が昨今増えているはずだと考えると、この流れには納得できるものがある。本校はもちろん、全都・全国的にも授業改善に取り組んでいる故の数値だと思う。

今年度は、「自分にはよいところがあると思いますか」という問いに対する肯定的な回答の割合が本校では高く、「当てはまらない」と回答した児童数は、東京都や全国の集計結果の半分以下だった。この問いを、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」の問いと重ねて見ると、よいところがあると思う児童の割合より、先生が認めてくれていると思う児童の割合の方が明らかに上回っていた。先生たちは褒め認めている、それでも自分にはよいところがあると思えない児童がいる、という現実がそこにはある。しかし、よいところは、思ってもいなかったところから伸び始めるのかもしれない上に、何歳からどの立場から何をきっかけに見いだされるかというこれから先のことは、調査結果は教えてくれない。「無い」のではなく、今見えていないだけのことかもしれないのだが……。

一昨年度の本校の6年生の中には、将来の夢を「漁師」と書いていた子がいた。そう思える理由には、学校では味わえない体験がどこかにあったのではないかと推察している。また、昨年度の6年生の中には、地域のバスケットボールチームでの経験から進路を考えた子もいた。自分と向き合う姿を励ましてくれる家族や地域や先生や友達がいて、自分と違う意見を受け止められたら、たいいていのことはどうにかなるのではないかと考えてくる。いろいろな大人や仲間に出会い、学校や学校ではないところで自分の良さを見つけ、ふるさとであるこの地域で人生に果敢に立ち向かっていく勇気をもてる子どもたちが、この先何十周年でも何百周年でも育っていくようにと、60周年目の秋に願っている。